

教祖現身お隠しまでの「おさしづ」と「道」

今号から、「おさしづ」における「道」について取り上げる。しかし、「おさしづ」は膨大であり、いきなりその全体をまとめて論じるのは困難である。「おさしづ」のなかでも、教祖が現身をもって直接にお話を伝えられた時期については、『稿本天理教教祖伝』の第10章に、当時の様子とお「おさしづ」の解説が詳しく記されている。ここでは、「おさしづ」に取り組む端緒として、『稿本天理教教祖伝』によりながら、この時期の「おさしづ」に限定し、「道」に着目しながら読み進めることにしたい。

教祖現身お隠しまでの「おさしづ」

①明治二十年一月四日（陰曆十二月十一日）

教祖お急き込みにて御身の内御様子あらたまり、御障りに付、飯降伊蔵へ御伺いを願うと、厳しくおさしづありたり。（教祖御居間の次の間にて）

②明治二十年一月九日（陰曆十二月十六日）

教祖御話

③明治二十年一月十日（陰曆十二月十七日）

飯降伊蔵を通しておさしづ

④明治二十年一月十三日（陰曆十二月二十日）

教祖御話

⑤明治二十年一月二十四日（陰曆正月元旦）

教祖御話（教祖床から起き上られ、お髪を御上げになって、一同に向い）

⑥明治二十年二月十七日（陰曆正月二十五日）夜

教祖の身上御障りに付、いかゞと飯降伊蔵により願

⑦明治二十年二月十八日（陰曆正月二十六日）早朝

二十六日のおつとめに就きて御願

教祖が現身をお隠しになるまでの「おさしづ」については、上記7つが『おさしづ』（改修版）に収録されている。この中で、②④⑤は「教祖御話」とあるように教祖によって、そのほかは後の本席飯降伊蔵によって伝えられた言葉である。このように、すべてが教祖によって伝えられた言葉ではないものの、教祖が現身をもっておいで下さったという点で、「おさしづ」における特別な時期であるということが出来る。

当時の「おさしづ」の書取りはそれほど厳密でなかったようである。『梅谷文書』（再版）に収録されている明治23年の書簡には、「おさしづ」の内容が、「何分御咄し早くて書取も十中八分通り書落し有之候間」（125頁）と記されているが、教祖の現身お隠しまでの時期についても、同様にそれ以上に書き切れなかったものがあったといえるかもしれない。それはこの時期の「おさしづ」理解を難しくするが、『稿本天理教教祖伝』第10章はそれを補完する上で大変に参考になる。

上記7つの「おさしづ」の中で、「道」という言葉が出てくるのは、①③④⑦の4つである。

四十九年前より

この時期の「おさしづ」の特徴と思われることの一つは、「四十九年前」ということが強調されることである。①では「さ

あ神が言う事嘘なら、四十九年前より今までこの道続きはせまい。」③においても「四十九年前よりの道の事、いかなる道も通りたであろう。」と言われている。また、「道」という言葉はないものの、④に「四十九年以前から何も分からん」、「四十九年以前より誠という思案があらう」、「長らく四十九年以前、何も分からん中に通り来た」とある。これらは陰曆明治19年の「おさしづ」であり、数え年で49年前は天保9年にあたる。その時から、この道は続いてきた、通ってきたと言われるのである。

この「道」という言葉の使い方は、過去を振り返ってそれまでの歩みを指した言い方である。それは、単に教えや信仰というよりは、教祖の「ひながた」についてや、教祖に導かれた信仰者たちの歩みを含んだ表現であり、今日的に言えば天理教の歩みを指しているということが出来る。「おふでさき」においても「月日より三十八ねんいぜんにて」（七号1）など天保9年の立教を指示するおうたは少なくないが、それが説く中心的な事柄は、「つとめ」に関する急ぎ込みである。この時期の「おさしづ」においては、天保9年からの「四十九年」の歩み全体を、「道」という言葉で総括されるようになってきているということが出来る。

「道」と「つとめ」

ただし、これらの「おさしづ」において、ただ四十九年以前からの歩みだけが強調して説かれているわけではない。そこでは、その長い歩みに照らして、今の心を定めてもらいたいということが一貫して説かれている。つまり、「つとめ」の急ぎ込みである。これらの「おさしづ」では、「神様の道の御話」あるいは「前の道を運ぶ」ことが「つとめ」を指している用例がある。

上記③の「おさしづ」には、本文のあとに説明書きが付されている。そこには、「右の者眞之亮へ神様の道の御話の事を迫りしところ…」と記されている。この部分が、『稿本天理教教祖伝』では「皆の者から、親神の道の御話の事、即ち、おつとめをしましよ。と言うて来たが、…」(309頁)と説明されている。それまでの「おさしづ」本文には「つとめ」という言葉は出てきていないが、この説明によれば、「神様の道の御話」とは「おつとめ」のこと、ということになる。

また、④の「おさしづ」において、「さあ今というへ前の道を運ぶと一時々々」とあるが、これは『稿本天理教教祖伝』では「今という今と成つては、どうでも話通りの事を、ともかくもやれ、何でもよいから、つとめをせよ」（314頁）と説明されている。ここでも、「前の道を運ぶ」ことが「話通りの事」すなわち「つとめ」を指している。これらの教祖が説かれた「道」の話は、もっぱら「つとめ」のこととして理解されてきたのである。

以上、教祖現身お隠しまでの「おさしづ」を「道」に着目して読むと、それは「神が言う事嘘なら、四十九年前より今までこの道続きはせまい」というお言葉によって、今の「道を運ぶ」（つとめをする）心を定めることを強く求められた「おさしづ」であると理解することができる。